

ハンス・レーマン著 谷川道子他訳

「ポストドラマ演劇」

同学社

「ポストドラマ演劇」という名の下にとらえられる現代の演劇状況を俯瞰するハンス・レーマンの一九九九年の著作が、谷川道子氏をはじめ、新野守広、本田雅也、三輪玲子、四ツ谷亮子、平田栄一朗といった、ドイツ語圏を中心とする演劇研究者のグループによって翻訳された。谷川道子氏は、ブレヒト、ハイナー・ミュラー、ピナ・バウシュを中心に、現代演劇に関わる理論と実践の両面において幅広い活躍しており、同氏が日本を代表する演劇研究者であることは、いまさらご紹介するまでもないかもしれない。現在フランクフルト大学演劇・映画・メディア学科の主任教授であり、ドイツ演劇学会の会長も務めていた著者のハンス・レーマンと谷川氏は、これまで日本で行われたハイナー・ミュラー関連のシンポジウム等を通じて旧知の間柄であり、この翻訳もそういった友好と幸福な信頼関係の上に成り立っていることを、読み進めていくうちにも強く感じることができた。

著作の表題となっている「ポストドラマ演劇 (Postdramatisches Theater)」という言葉のうちには、そもそも「ポス

トドラマ演劇」とは何かという問いに答えることにもなる、この著作における最も重要な二つの理論的なアクセントが組み込まれているように思われる。その一つは、「筋行動 (Handlung)」を模倣するドラマという、伝統的に形成されてきた西欧演劇のパラダイムからの離反であり、もう一つは、「戯曲」という文学上のジャンルに包摂されるものに寄生することのない「演劇」、つまり演じる行為そのものの自律化である。レーマンによれば、二〇世紀初頭の歴史的アヴァンギャルドを先駆としつつ、一九七〇年代以降、「日常生活におけるメディアの普及と遍在を背景に、本書でポストドラマ演劇と名づけるような、多様な新しい演劇的な言説形式が登場してきている」。こういった現在進行中の演劇の姿をとらえるために、章の配置自体としては比較的伝統的な構成が取られている。本書は、まず第一章で、伝統的な演劇における中心的カテゴリーとしての「ドラマ」に焦点を合わせることによって新たなパラダイムを際立たせ、ついで第二章「前史」で特に歴史的アヴァンギャルドに焦点を当てつつ、ポストドラマ演劇の系譜を確認している。そして、第三章「ポストドラマ演劇のパノラマ」で新たな演劇のあり方のさまざまな局面を概観した後、第四章から最後の第九章にいたるまで、「パフォーマンス」、「テクスト」、「空間」、「時間」、「身体」、「メディア」といったさまざまな切り口によって、ポストドラマ演劇の特質を描き出している。

こういった章の配置を「伝統的」と表現したが、谷川道子氏のあとがきによると、この著作は「たしかに整合的で

はないし、論述も拡散的に思えてかなり読みにくい。本訳書では読みやすいようにと漢数字で章と節を立てたが、原書は実際にはそういう秩序立てのないいわばモザイク的・パッチワーク的な構成にもなっている」とのことである。そういったいわば非体系的・非線状的な書き方は、それぞれの章の中に分け入っていくとき、実際に感じられるものである。圧倒的な量の固有名詞がハイパーテキスト的に劇場、演出家、作品、理論書、そして驚くべき数の実際の上演を指し示している。そのリンクの先をたどることは多くの場合この著書では行われておらず、むしろきわめて優れたリンク集として機能しているといつてよいかもしれない。いずれにせよ網の目のように張りめぐらされた断片たちによって指し示されるものの形作る宇宙は、ゴダールの『映画史』のように、それを知るものにとってはおそらく途方もない快感を生み出すことになるだろう。

そういった著作自体のもつ特徴はむしろ、著作で語られている新しい演劇のパラダイムを反映したものなのかもしれない。すでに引用した言葉のうちにもあるように、レーマンはポストドラマ演劇の登場をはっきりとメディアの開と関連づけてとらえている。ポストドラマ演劇の特質として語られていることがら、とりわけハイパーテキストを筆頭とするような新たなメディアのパラダイムと各所で重なり合っただけでなく、その意味で当たり前のことなのかもしれない。そういった点においても、本書は演劇の関係者にとつただけでなく、現代文化に関心をもつすべてのの人にとって、文化の転換のプロセスをきわめて興味深

く示してくれるものとなっている。

演劇の新たなパラダイムを見渡すこの著作がドイツの演劇研究者、演劇界において（否定的なものも含め）非常に大きな反響を呼んだことが、あとがきでは報告されている。この著作は現代演劇の理論的位置づけを考察する上で間違いなく基本的文献の一つに数えられることになるだろうが、この著作が日本でも、演劇研究者にとどまらず、実際の上演に関わる人たちの間で広く読まれ、さらに新たな「演劇」が展開されるための論議の拠点となることを大いに期待したい。

（山口裕之）